

とがある。ここでも、フェイス侵害の可能性が考えられる。具体的に話をするだけではポライトネスではなくなるという、OPI での、わかりやすい例だと思われる。これは、上下関係が明確に分かっている場合、具体的にわかりやすく仕えたとしても、相手の面子を考慮していないことになると考えられる。

表 4.4.1 会話断片：話が膨らむと少ない言葉で言い換えるケース 1

T: あの一、ピザを取るのは大変なんですか？手続き的に
L: んー、向こう、向こう、そうですね、ピザない状態で、まあ日本に入るの、あの、最初から取るの難しいです、ま更新は、まあできるんですけど(はい)、こっちは、**、うん、ピザない状態でまあ、ブラジルからまあ、日本に来るのは、難しい、くなってきますね、まあ以前…
T: あ、昔に比べると、簡単には取れない
L: うん、うん、そうですね
T: あの一、要するに 仕事先が決まってるとか、何か血縁関係があるとか、の証明の書類がうるさくなってると、そういうことですか
L: うん、そうですね(んー)、はい

表 4.4.2 会話断片：話が膨らむと少ない言葉で言い換えるケース 2

L: そうですね一 、いやでも地震があった時は、まあ、多分、2008年、まあ2008年9年ぐらいの(うん)、不況で日本結構仕事なくなって(うん、はい)、まあ、そういう支援で、帰国してくださいっていうのまあ出たんですけど、で、まあ、2011年には、ごろには、仕事もどンドン増えて行ったんですけど、まあそういう地震があっても、なんたる、ブラジル人もまあ日本のこと考えないで、まあそのまま帰った人たちもいるので(はい)、まあどっちもどっち(どっちもどっち<笑>)って感じなんですけど、はい(んー)、困ってる時には、自分たちも、**ないで、まあ自分の国に帰って(うん)、って感じだったんで、まあ
T: まあ、一方が責められる問題では(そうですね)、ないかなーって(はい)ことですね、はい、わかりました、で、 今まあ、えーと、[L]さん自身はその、すぐこう、社会的な仕事を、その仕事自身(んー)、もちろんお金もらっているけど、仕事ではあるけど、比較的、あの一、行政なんかがそういう窓口を、相談窓口を設けてもいろいろな部分を担っているわけですよね、で、あの一、特にこの{地名1}町とかは、えー、たくさん、そういう人た、日系人がいる窓口なので、えー、{地名1}の町長さんに、そういう窓口を是非作ってくださいという、こう、直訴に行くというロールプレイをやっていたらどうかと思うんですけど、いかがでしょうか
L: はい

4.5 ベイズ更新による考察

本節では、図 4.5.1 のように、応答詞(「はい」や「はいはいはい」と笑い(<笑>)の出現数を 1 回目から 5 回目まで、別々にカウントし、「笑い」が出て「はい」が出ている場合のポライトネス理論の水準を次の 3 つに定めて、モデル化したものである。

- 1) ポジティブ
- 2) ゼロ
- 3) ネガティブ

次に、尤度を算出する

その次に、事前確率を設定する。ここでは、理由不十分の原理から事前確率を等しく設定した。

さらに、カウントしたデータを入力し、事後確率を計算した。

最後に、データを変えてみる。これらをグラフに図示したのが、図 4.5.2 である。

「はい」と<笑>とをベイズで推定				
(1)「はいはいはい」と<笑>のモデル化				
	ポジティブ(H ₁)	ゼロ(H ₂)	ネガティブ(H ₃)	
憎因子の数	3	3	3	
愛因子の数	4	2	3	
(2) 尤度の算出				
データ(D)	P(D H ₁)	P(D H ₂)	P(D H ₃)	
悪印象(憎因子選択)	0.429	0.600	0.500	
良印象(愛因子選択)	0.571	0.400	0.500	
(3) 事前確率の設定				
	嫌い	普通	好き	
最初の事前確率	0.3	0.4	0.3	
(4) データ入力と事後確率の算出				
データ回数	データ(D)	嫌い(H ₁)	普通(H ₂)	好き(H ₃)
		0.300	0.400	0.300
1回	良	0.414	0.276	0.310
2回	悪	0.414	0.276	0.310
3回	良	0.527	0.176	0.297
4回	悪	0.527	0.176	0.297
5回	良	0.630	0.105	0.266
6回				
7回				
8回				
9回				
10回				

図 4.5.1 「はい」と「笑い」のポライトネス的ベイズ更新

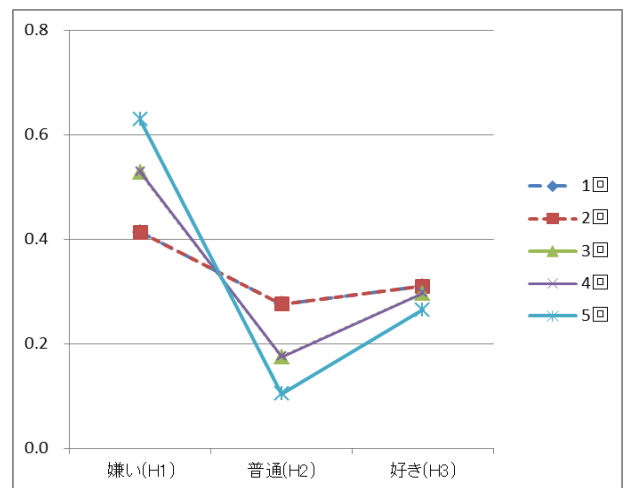


図 4.5.2 1 回目から 5 回目までの「はい」と「笑い」のポライトネス的ベイズ更新

5 まとめ・今後の展望

本稿では、1回目のOPI試験を踏まえて、省略と反復・繰り返しの視点から、フィラーや笑いをポライトネス理論の視点も意識して考察したものである。

テスターによる「はい はい はい」などは一見すると、強い同意の応答句と捉えがちだが、含意されることは、決して好意的ではなく、OPI特有の「突き上げ(Probes)」になっている。この突き上げにより、非母国語話者である受験者は、「あっ、その一、えーと(笑い)」などのように、あらゆる非言語的側面が生成されている行為が読み取れた。この部分でも、何とか答えようとしながらも、フィラーや笑いなどの非言語的側面が顕著に出ている。ここでの評価もあり得ると思われる。それは、会話のつながりを進める機能であり、発話と共に、重要な日本語能力であるとも考えられるからである。

1回目より、2回目、2回目より3回目と、人間同士の接触回数が進むにつれて、非言語的側面や語用論的な側面が重要になってくるとされる。

今後の展望として、省略と反復・繰り返しは、語用論のポライトネス理論に深く関係しており、前回の接触を踏まえて生成されるものである。非言語のフィラーや笑い、応答などは、自然な会話では、単体ではなく、ポライトネスの含意とのセットで考慮されるものであると思われる。さらに、映像データやスクリプトを用いて仮説検証を重ね、より自然な対話のパターンを見出したいと考えており、結果として、対話システムやロボットに生かしたい。

参考文献

- 1) 独立行政法人情報処理推進機構 AI 白書編集委員会(2017)「AI 白書 2017」KADOKAWA
- 2) 杉山ら(2018)「文脈に沿った発話理解・生成を行うドメイン特化型雑談対話システムの実験的検討」, SIG-SLUD-B802-33, 人工知能学会
- 3) 国立国語研究所「日本語学習者会話データベース 縦断調査編」

https://db3.ninjal.ac.jp/judan_db/

- 4) 野山(2009)「集住地域に定住する日本語非母国語話者(日系ブラジル人)の言語生活に関する縦断的研究—OPI(Oral Proficiency Interview)テストを活用した会話データを事例として」社会言語科学会第22回大会論文集掲載論文
- 5) 許(2017)「接触場面における日本語学習者の聞き返し使用の横断的研究—3人の中国人日本語学習者の在日9か月間の発話データをもとに—」大分県立芸術文化短期大学紀要 第55巻(2017年)
- 6) 寺尾(2010)「文末形式の運用とスタイル切り替え—日本語を学ぶ中国語母語話者の横断データから—」『阪大日本語研究』22巻
- 7) 久野(1978)『談話の文法』大修館書店
- 8) 堂下・白井・溝口・新美・田中(1998)『音声による人間と機械の対話』「対話過程の基本的特徴と対話における省略の処理(第2章)」オーム社
- 9) 伝(1997)「統一モデルに基づく話し言葉の解析」自然言語処理 Vol. 4 No. 1
- 10) 佐藤・乾(2018)「因果関係に基づくデータサンプリングを利用した雑談応答学習」言語処理学会 第24回大会 発表論文集
- 11) 太田・土屋・中川(2009)「フィラー予測モデルに基づく話し言葉言語モデルの構築」情報処理学会論文誌 Vol. 50 No. 2, 477-487
- 12) ペネロピ・ブラウン・スティーヴン・C・レヴィンソン(1987)「ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象」 “Politeness: Some Universals in Language Usage”
- 13) 福田 一雄(2013)「対人関係の言語学」 開拓社
- 14) 松原望(2008)「入門ベイズ統計—意思決定の理論と発展」東京書籍